

歴史探訪 Part II - ⑬

江戸川木材工業株式会社

顧問 清水 太郎

去る10月14日、東海道ネットワークの会-21、第55回例会がありました。テーマは、幕末の神奈川宿と横浜「なぜ横浜はこれほどの発展を遂げたのか」であります。

JR東神奈川駅、午前10時に17名の会員が集まりました。案内役は、横浜で生まれ育った小山副会長です。氏の周到な準備と熱い思いで、一日中楽しく横浜の生い立ちと発展について学ぶことが出来ました。

東神奈川駅から徒歩5分の位置に宿場の案内所があり、移設された高札場が一行を迎えてくれました。所内にあるジオラマを見て、平面でしか知らなかった横浜の原形を理解することが出来ました。

歌川広重が描いた大判錦絵、神奈川・台之景は素晴らしい。二次元の世界を三次元に表現する天性の才能が遺憾なく発揮されております。十数軒の旅籠が軒を接して建ち、宿場につきものの引き込み女が趣を添えています。

遠くに突き出ているのは本牧の岬で、今は眺望も豊かな港の見える丘公園があります。

この錦絵を頭に入れて宿場のあった坂の下に立ちますと、今は眺望抜群の高層住宅が林立し、海は埋め立てられて街となり、坂本龍馬の夫人、おりょうさんが働いていたことで知られている「さくらや」は「田中屋」と名を変え、小粋な料亭として営業しております。

田中屋脇の急な石段を50段ほど下りますと、そこは陸地となっていて横浜駅へ出ます。

地下鉄みなとみらい線に乗りますと、終点が元町中華街駅で、今日の昼食会場「桂宮」は賑わっております。

昼食時、上林さんの息子さんが著した、中央公書、『^{かんのう}観応の^{じょうらん}擾乱』の紹介を受けました。

後日要めて繕きますと、室町幕府初代将軍足利尊氏とその弟、直義、直冬父子が、南朝まで巻き込んで繰り展げる全国規模の内乱の経緯を綴った本格的な歴史小説であります。事務局の杉井さんが何故ここで紹介されたのか理解出来ました。第二次観応の擾乱で両軍の決戦場となった処が東海道有数の名所薩埵峠でありました。

昼食後、中華街、元町商店街を散策し、駅のエレベーターをR階まで昇りますと、そこはアメリカ山公園に続いて外人墓地があります。

幕末の五ヶ国開港条約では、当初は神奈川宿の湊が開港約束地になっておりましたが、その後横浜村に変更しました。



小山氏によりますと、水深が浅い海を湊、大型船が停泊できる処を港と使い分けるそうです。開港当初は神奈川宿周辺が外国人の居留地となり、貿易商人が来日しますと、大型商船が着岸可能になるよう整備され、中国人が住む地域が中華街として発展し、イギリス軍陣営、フランス軍陣営等埋立てと居留地、港の整備により横浜は大きく発展、今では東京に次ぐ日本で2番目の大都市となりました。

ペリー提督来航と共にやって来た部下の兵士が病気で亡くなり海に見える丘に葬ってほしいという故人の遺志により、横浜村増徳院の境内が提供され、外人墓地の起源となりました。丘の上を150m歩きますと、港に見える丘公園があります。隣は「フランス山」と呼ばれております。これは居留民を保護する目的で、イギリス軍やフランス軍がこの地に駐屯していたことに始まります。風で矢車をまわして水を汲み上げた井戸の跡が残っています。

崖の上から石段を下って、地下鉄で一駅乗り、日本大通り駅を出ますと、そこは官公庁街で、神奈川県庁、横浜市庁の耐火構造のレンガの外壁は趣があります。

横浜開港資料館見学後、大さん橋方向へ歩き、整備された象の鼻と呼ばれている防波堤の先端が今日の最終目的地です。

横浜スタジアムを横に見て関内駅で解散となりました。

セリーグで3位になったDeNAは甲子園で阪神タイガースと戦っていますが、雨の中、阪神、広島を下して、日本シリーズへと進出しようとは一体誰が予測したことでしょうか。

日本近世史の授業で「行徳の塩と神奈川」について学びました。

行徳(市川市)は関東における塩の一大産地でありました。江戸時代のはじめ、行徳の塩は軍事物資として幕府から保護されるとともに江戸市中でも多く販売されておりました。

しかし、上方航路の整備とともに瀬戸内海で生産された「十州塩」が大量に江戸へ運ばれ行徳の塩を駆逐して行きます。しかし、行徳では古積塩と呼ばれる、苦汁(にがり)などの水分を除去した塩を開発しました。

遠距離輸送や長期保存しても目減りしない古積塩は、江戸川、利根川舟運を利用して北関東に販路を広げて行きました。

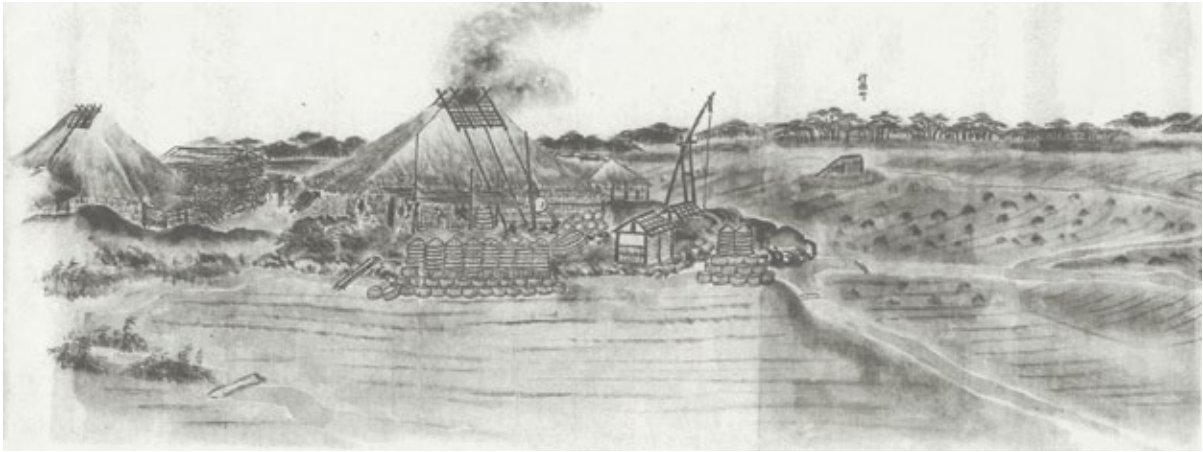
反面、行徳の塩の生産は江戸川の氾濫や天候に左右され、生産量不足となります。不足する塩を補うため行徳は十州塩を購入し、品質改良した後、行徳の塩として販売することもありました。この十州塩は神奈川湊からも行徳に運ばれておりました。

江戸の下り塩仲買問屋たちは、江戸を経由しないこの流通ルートの問題視して訴訟を起こしましたが幕府に退けられてしまいます。(安永年間1772-81)

幕府は江戸の仲買問屋を通すよりも、十州塩を焼いて乾燥させ、付加価値をつけて流通させた方が国益に資するとの判断に基づくものと思われます。

後の代(よ)老中水野忠邦による天保の改革(1841)が実施されましたが、その目玉の一つ株仲間の解散は、特権を排除し国益を重視した証しであります。

(別図は行徳に於ける十州塩などを乾燥し保存する様子を描いたものであります。)



行徳の塩浜と釜屋「利根川名所勝景絵図」江戸時代 船橋市西図書館蔵
 ※笹（ざる）にも注目。「笹取法」。
 『私船と海運』（横浜市博物館ほか、2017年）より引用。

